

2019.2
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみや 薬

2号

第41巻
No.355



ハコベ *Stellaria media* Villars (ナデシコ科 *Caryophyllaceae*)

生薬 ハンロウ（繁縷） 開花時に採取し、陽乾する。

成分 不詳。

効能 民間では浄血、催乳薬として婦人の産前産後に用いる。歯槽膿漏の予防に、生の搾り汁に塩を加え、フライパンで炒った塩で歯を磨く。



生薬 ハンロウ

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



日本全国普通に陽の当たる路傍や田畑でみられる越年草で、冬でも陽を受け成長します。柔らかい茎は下部から多く枝分かれし、下部は地面を這うようにして四方に広がり、上部は斜上して立ち上がり、高さ10-20cmになります。葉は卵形、鋭頭で長さ1-2cm、全縁で株元の葉は長柄があり、上部は無柄。花は3-10月と周年といってもよいほど長い期間、次から次へと咲きます。集散花序を頂生または腋生し、径5-6mm、白色の5弁花を咲かせます。花弁は基部まで深裂し、まるで10弁花のように見えます。雪の降らない地域では、お正月に摘み取ることが可能で、七草がゆの一種として親しまれています。お正月の人日の節句(1月7日)に七草がゆを食べる風習は、皇太神宮の行事や儀式などについて記した『皇太神宮儀式帳』の804年の記録に「七日 新菜御 作 奉」と記され、朝廷の年中行事・儀式について記した『年中行事秘抄』(1293-99)に「七種菜 薺、繁縷、芹、菁、御形、須々代、佛座」と七種の菜があげられていることから、平安時代後期には行われていた風習と推測されます。

この植物は史前帰化植物といわれ、有史以前に麦の伝来とともにやってきた植物と考えられています。秋に水田から水が落とされ、稲が刈られた後、陽が当たると一斉に芽生える雑草たちの一つです。その中にハコベ族 (*Alsineae*) のハコベ(コハコベ)やミミナグサ (*Cerastium caespitosum*)、ウシハコベ (*Malachium aquaticum*)、ノミノツヅリ (*Arenaria serpyllifolia*) などがあります。麦の原産地は中近東ともいわれていますが、はっきりしたことはわかりません。重要な穀物であるムギが古い時代に世界中に伝わったことは想像に難しくなく、日本には約2千年前の弥生前期頃に入ってきたと考えられています。

平安時代の本草書『本草和名』(918)に「繁蕒 和名波久倍良」と、『和名抄』(931-37)には「繁蕒 和名八久倍良」、「鶏腸草 一名繁蕒、和名 波久倍良」とあり、二種類の漢名と一種の和名を持つ身近な植物であったことが伺えます。漢名の「繁縷」について李時珍(1518-93)は「この草は茎の蔓が甚だ繁り、中に一縷がある。故に名けたのだ」とその由来をのべています。ここでいう縷とはハコベの茎を折ると中から出る糸状のものを指すといわれています。和名の「はくべ」は『和訓栞』(1777-1877)に「葉をくばりしくの義にや。今はこべといへり」とあり、「葉配り」に由来するという説が書かれています。別説に「はく」は帛で、縷と同じく茎を折った時の糸を絹糸に見立て、「べら」は群がる意の古語からきているという説です。室町時代の国語辞典『下学集』(1444)には「繁菜」と「はくべら」から変化したフリガナが振られ、江戸時代に入ると『多識編』(1612)に「繁縷 波久倍良又云う波已倍」と初めてハコベの名が出てきます。続いて「鶏腸草 今案ずるに牟良左岐波奈乃波已倍」とあり、こちらは別の植物、キュウリグサ (*Trigonotis peduncularis*) と思われる草を充てています。江戸中期の本草書『大和本草』(1709)には記載がなく、ウシハコベについての記載があります。『和漢三才』(1713)には「鷄腸菜 繁縷、和名八久倍良、俗に云う八古倍」とあり、「端午の旦、莖葉を採り、絞って汁を用いる。塩に鮑貝に盛り、これを焼き、また汁を入れ焼くなり。七度焙乾す。毎日、齒を揩、眼を洗いて可也」と歯磨き粉としての利用も記しています。別項に「鶏腸草 むらさきはこべ」とあるのは『多識編』と同様です。江戸後期の『本草綱目啓蒙』(1803)には詳しく記載され、ウシハコベやオオヤマハコベ (*Stellaria monosperma* var. *japonica*)、ヤマハコベ (*Stellaria uchiyamana*) も記しています。別項の鶏腸草はキク科のコオニタビラコ (*Lapsana apogonoides*) のことと記しています。(村上守一 記)